近世大和観光における案内人の史的研究

安田　真紀子

はじめに

近年、近世の旅や観光に関する研究が盛んに行われ、とくに道中日記の分析から、伊勢参りや西国巡礼の経路、旅の経費、宿泊形態、名所や社寺参詣の状況など、近世における旅の実態が明らかとなっている。伊勢参りや西国巡礼のルートについては、山本光正氏・桜井邦夫氏・小松芳郎氏・小野寺淳氏・田中智彦氏等の研究により、数種のパターンが確認され、類型化されている。[1] また、伊勢参りや社寺参詣の実態に関しても、桜井邦夫氏や高橋陽一氏、鎌田道隆氏等によって明らかとなってきており、[2] 江戸や京都など経路の途時にあたる都市での旅人の動向についても道中日記からの解明が進んでいる。[3] こうした道中日記を用いた旅の実態解明は、交通史や歴史地理学研究のみならず、地方史や観光学の分野からも注目され、市町村単位での道中日記の翻刻や研究報告が相次いでいる。

しかしながら、大和における旅の実態に迫った研究は少ないのではないだろうか。奈良は、元禄・宝永期の東大寺大仏復興を契機に、観光都市へと大きく発展を遂げる。しかも、大和は伊勢に隣接しており、多数の古社寺が存在するため、大和を訪れる参宮者は少なくない。これまでの参宮経路に関する研究により、伊勢参りの多くは、奈良見物や大和めぐりを伴っていることが確認されている。

近世の大和観光の問題については、大久保信治氏や山田浩之氏、古川聡子氏の論考が知られている。[4] 大久保信治氏は旅籠屋町間の客引き行為にかかわる紛議を街道をめぐる

地域的な側面から論じ、また、山田氏は案内記と案内人の発生や役割について細部にわたって分析している。また、古川聡子氏は、観光都市としての奈良町を政策的・経済史的な側面から論及している。三氏とも、旅人を受け入れる、または誘引する立場である観光業者の実態を具体的に論じており、近世大和における観光の問題点を提起している。

本稿では、これら先学の研究に依拠しながら、奈良見物・大和めぐりにおける旅の経路に着目し、とくに、旅人を誘引し、その経路に影響を与えたであろう案内人の動向を探ってみたい。伊勢参りや西国巡礼ルートの研究において、案内記や案内業者の存在が指摘されており、[5] 奈良見物や大和めぐりにおいても、それらの果たした役割は大きいものと考える。そこで、まずは道中日記から、大和における案内人の実態を明らかにすることを第一の目的としたい。その上で、近世の大和観光における案内人の役割について考えてみたい。

近世の観光における案内人を論ずるにあたって、「案内」という語句の持つ近世的な意味について触れておきたい。『日葡辞書』によれば、案内は「前もってしらせること、あるいは、最初にことづけすること」とあり、案内者は「案内人、あるいは、ある場所の入口や出口を知っている人、また、儀式の進め方などに関する事をよく心得ている人」とある。[6] 江戸時代以前において、案内は通知することを意味し、案内者は事情に通じ先導的な役割をする人といった意味を持っていたものと解釈できる。それが江戸時代に入ると、手引き・道案内といった意味合いが強くなる。庶民の旅が増加するに伴い、各地の寺社では参詣者の手引きとして、案内記が出版・販売され、三都や奈良などでも多くの案内記が刊行されている。案内記は、近世前期には名所の故事や由来など物語的要素を含んだ名所記が主流であったが、旅人層の拡大により、寺社や名所・旧跡地の説明に加えて現地までの行程や駄賃・旅宿などをも記した道中案内記へと移行していく。道中案内記には、観光ガイドとしての機能が含まれ、近世中期以降は「案内」の語句にも旅行者に供する手引きといった意味合いが成立している。道中案内記としては、明暦四年（一六五八）の『京童』や万治元年（一六五八）に刊行された『東海道名所記』が早い例であろう。大和においても、寛文十一年（一六七一）の『吉野山独案内』をはじめ、貞享元年（一六八四）『南都名所道筋記』、天明三年（一七八三）『大和廻り道の枝折』な

ど多種の案内記が刊行されている。案内記は、案内人同様、旅の大衆化により需要を増したものと考えられ、案内記・案内人各々の役割を相互に検証することで、近世の観光の実態をより明確にすることができるであろう。大和においても、案内記類については、これまで比較的多くの研究がなされているので、[7] 本稿では案内人について検証する。

一　案内人の発生と組織

今回対象とした道中日記は、大和についての記載が認められる八十五点（【表1】参照）であるが、そのほとんどは伊勢参宮日記あるいは西国巡礼日記である。

近世後期に、旅は庶民の娯楽のひとつとなっていったことは、これまでの旅や観光に関する研究の中で明らかである。伊勢参りや西国巡礼も、信仰色の強い旅から、娯楽的要素の多い旅へと変化していった。それは、残存するこれらの道中日記からもみてとれる。したがって、表向きは伊勢参りや西国巡礼ではあるが、実際にはその他の神社仏閣参拝や名所めぐりなど、物見遊山が旅の大部分を占める。社寺参詣や名所めぐりが盛んとなった背景のひとつには、名所記や名所絵図・道中案内記などの出版があげられる。これらの出版物は、人々の憧憬を掻き立て、現地へといざなう効果は充分にあったであろう。また、一方で、現地を訪れた人々に対して、寺社の由来や建造物、名所などについて解説をする観光ガイド「案内人」の活躍も、近世的な旅においては欠かせないものであった。道中日記には「案内を取」「案内賃」などの記述が散見でき、大和においても、奈良を中心に、多数の案内人が存在していたことが認められる。

道中日記から、奈良において案内人の存在が確認できるのは、宝永三年（一七〇六）の『西国順礼日記』［2（【表1】の№を示す。以降同じ）］が最も早い。しかし、宮本勉氏や山田浩之氏は、元禄六年（一六九三）の『佐藤善兵衛道中記』［1］からその存在がうかがわれると、指摘している。[8] また、山田浩之氏は『東大寺辞典』の大仏開眼供養の記事[9]に注目し、「元禄・宝永頃に出現したと考えられる」としている。[10] 江戸時代の大仏開眼供養は、元禄五年（一六九二）三月八日から四月八日の約一ヶ月間行われ、二十万人以上が訪れたといわれている。この時の様子を、奈良奉行所与力玉井定時が記録しており、その中に「他国ノ者

【表 1】道中日記の奈良における案内人の有無と見物場所

案内について記載のないものは、案内人欄に × を示した。案内賃の記載のないものは空欄とした。
同行者の人数は、奈良見物を行った時点での人数を示した。
※: 奈良で大坂までの案内を雇っているため、奈良見物分も含まれる可能性が考えられる。

No.	年代	案内人	案内賃	同行	出典史料名
			見　物　場　所		
1	元禄6年 (1693)	×			佐藤善兵衛道中記(『地方史静岡』16)
			興福寺・南円堂・猿沢池・采女宮・楊貴妃桜・左府の森・三笠山・大御堂・春日社・若宮・東大寺・八幡宮・二月堂・三月堂・四月堂・若狭井・鐘楼・大仏殿		
2	宝永3年 (1706)	○		28 人	西国道中記(『海上町史研究』25)
			南円堂・興福寺・春日社・三笠山・手向山・二月堂・三昧堂・法華堂・念仏堂・鐘楼・俊乗堂・大仏殿・勧進所・猿沢池		
3	寛延2年 (1749)	○	20 文	1 人	(仮題)伊勢参宮記(『西垣晴次先生退官記念宗教史・地方史論纂』)
			大仏殿・二月堂・春日社・八幡宮・興福寺・猿沢池等		
4	宝暦10年 (1760)	○	64 文	8 人	伊勢参宮道中記全(『二戸史料叢書』6)
			猿沢池・浅香山・楊貴妃桜・左府の森・三笠山・大御堂・春日社・尾花谷・飛火野・若草山・手向山・法華堂・二月堂・若狭井・三昧堂・念仏堂・鐘楼・俊乗堂・大仏殿・勧進所・戒壇堂・南大門・轟橋・雲井坂・興福寺・元興寺		
5	明和4年 (1767)	×		4 人	上方道中記(『磐梯町史資料編Ⅲ』)
			元興寺・三笠山・春日社・鐘楼・若草山・南円堂・興福寺・大仏殿		
6	天明6年 (1786)	○	42 文	5 人	伊勢参宮道中記(『いわき地域学會図書』15)
			猿沢池・采女宮・衣掛柳・浅香山・楊貴妃桜・左府の森・十三鐘・春日社・三笠山・三月堂・二月堂・若狭井・鐘楼・大仏殿・南円堂		
7	寛政3年 (1791)	○			い勢参宮道中記(『梁川町史資料集』27)
			「此所ニて案内ヲとり、なら中ヲ見物仕候」		
8	寛政6年 (1794)	×		10 人	伊勢参宮所々各所並道法道中記(『東北学院大学東北文化研究所紀要24』)
			佐保山・眉間寺・般若寺・勧進所・龍松院・空海寺・東大寺・鐘楼・二月堂・三月堂・春日社・元興寺・大御堂・采女宮・猿沢池・衣掛柳・楊貴妃桜・東南院・八幡宮・東金堂・みどり池		
9	寛政９年 (1797)	○	何人成共 88 文	6 人ヵ	上方一見手引帳(『天理参考館報』15)
			猿沢池・采女宮・衣掛柳・楊貴妃桜・扇の芝・春日社・三笠山・丑塚・金長石・二月堂・三月堂・四月堂・十三鐘・大仏殿・景清門・聖武天皇陵・興福寺		
10	文化3年 (1806)	×			道中参所附(『伊勢道中記史料』世田谷区教育委員会)
			大仏殿・景清門・宝蔵・中門・南大門・鐘楼・四月堂・若狭井・良弁杉・二月堂・三月堂・八幡宮・若宮八幡・三笠山・春日社・若宮・元興寺・南円堂・猿沢池・衣掛柳・楊貴妃桜・采女宮		
11	文化4年 (1807)	○	205 文	5 人ヵ	伊勢道中日記(『土浦市史資料』1)
			聖武天皇陵・晒し場・般若寺・知足院・二月堂・三月堂・四月堂・若狭井・良弁杉・念仏堂・鐘楼・大仏殿・手向山・春日社・新薬師寺・大御堂・文殊四郎鍛冶屋・猿沢池・采女宮・衣掛柳・興福寺・南円堂・元興寺・北山十八間戸		
12	文化4年 (1807)	×			名所古跡参詣覚帳(『伊勢道中記史料』世田谷区教育委員会)
			大仏殿・春日社、「其外色々不残拝申候」		
13	文化4年 (1807)	×			意雑記(『伊勢道中記史料』世田谷区教育委員会)
			「南都名所古跡さくり」、春日社・三笠山		
14	文化7年 (1810)	×			道中記覚(『道中記覚』水分公民館)
			春日社・猿沢池・相生の松・大仏殿・鐘楼・興福寺・南円堂・若狭井		
15	文化10年 (1813)	○			海陸道順達記(『海陸道順達日記』法政大学出版局)
			春日社・二月堂・三月堂・三笠山・八重桜・大仏殿		
16	文化11年 (1814)	×		不明	道中記(『二戸史料叢書』6)
			南円堂・春日社・若宮・三笠山・手向山・猿沢池・采女宮・楊貴妃桜・興福寺・大仏殿・二月堂・四月堂・鐘楼・衣掛柳・般若寺		
17	文化11年 (1814)	×			道中之日記(『入間市史』近世資料編)
18	文化11年 (1814)	×		12 人	万宿覚帳(『多摩市史』資料編2)
19	文化14年 (1817)	○	140 文	3 人	道中日記(『きよのさんと歩く江戸六百里』バジリコ)
			猿沢池・俊乗堂・三月堂		

No.	年代	案内人	案内賃	同行	出典史料名
			見　物　場　所		
20	文化14年 (1817)	×		6人	伊勢参宮日記(『伊勢参宮日記勝浦村松賀屋永嶋本』)
			春日社・元興寺・南円堂・三笠山・東大寺・大仏殿・三條小鍛冶・晒屋		
21	文政5年 (1822)	×		12人	伊勢参宮并大社拝礼記行(『金井忠兵衛旅日記』)
			南円堂・興福寺・猿沢池・采女宮・衣掛柳・春日社・若宮・大仏殿・鐘楼・二月堂・三笠山・良弁杉・若狭井・浅香山・三月堂・飛火野・野守池・大御堂・三昧堂		
22	文政6年 (1823)	○	何人ニ而代100文		伊勢参宮旅日記(『石巻の歴史』9)
			景清門・大仏殿・若狭井・鐘楼・二月堂・三月堂・若宮八幡・良弁杉・春日社・采女宮・興福寺・猿沢池・興福寺・南円堂		
23	文政9年 (1826)	○		1人	山海日記(『府中市郷土資料集』4)
			猿沢池・衣掛柳・采女宮・元興寺・春日社・三笠山・手向山・三月堂・二月堂・若狭井・三昧堂・鐘楼・大仏殿・南大門・轟橋・雲井坂・興福寺		
24	文政9年 (1826)	×			万字覚帳(『多賀城市史』5)
			二月堂・三月堂・四月堂・鐘楼・大仏殿・鐘楼・南円堂・興福寺・春日社		
25	文政10年 (1827)	○	88文	7人	伊勢参宮道中記(『梁川町史資料集』27)
			景清門・宝蔵・大仏殿・轟橋・興福寺・南円堂・般若寺・元興寺・眉間寺・猿沢池・采女宮・衣掛柳・楊貴妃桜・左府の森・大御堂・春日社・若宮・八幡宮・三月堂・二月堂・若狭井・大仏殿		
26	文政11年 (1828)	○	88文	3人	伊勢参宮紀行(『藤沢市史料集』28)
			猿沢池・興福寺・大御堂・春日社・若宮・手向山・八幡若宮・三月堂・二月堂・四月堂・鐘楼・大仏殿・轟橋・雲井坂・興福寺・南円堂		
27	文政11年 (1828)	×		18人	伊勢太々講夫ヨリ所々神社仏客道中日記帳(『藤沢市史料集』28)
			春日社・大仏殿・二月堂・其外緩々参詣		
28	文政13年 (1830)	○	壱人前に5文つゝ出し	9人	伊勢参宮道中日記(『会津高郷村史』Ⅰ)
			南円堂・春日社・猿沢池・衣掛柳・大御堂・三笠山・正月堂(?)・二月堂・三月堂・花の松・鐘楼・大仏殿		
29	文政13年 (1830)	×			道中日記控(『武州多摩郡郷地村道中記』昭島歴史をよむ会)
			元興寺・猿沢池・衣掛柳・八重桜・大御堂・春日社・二月堂・大仏殿・東大寺・興福寺・鐘楼・南円堂		
30	天保3年 (1832)	○			伊勢参宮記(『梁川町史資料集』27)
			景清門・大仏殿・二月堂・三月堂・八幡宮・春日社・若宮・采女宮・猿沢池・飛鳥山・南円堂・興福寺		
31	天保4年 (1833)	※			参宮日記帳(『伊勢道中記史料』世田谷区教育委員会)
			猿沢池・春日社・若宮・三笠山・若宮八幡・宝蔵・三月堂・二月堂・四月堂・子安地蔵・鐘楼・大仏殿・南円堂		
32	天保6年 (1835)	※			伊勢参宮日記(『伊勢道中記史料』世田谷区教育委員会)
			猿沢池・采女宮・春日社・若宮・八幡宮・三月堂・二月堂・鐘楼・大仏殿・興福寺・氷室社・南円堂		
33	天保6年 (1835)	○	164文	12人	道中記覚(『多賀城市史』5)
			景清門・大仏殿・鐘楼・四月堂・二月堂・良弁杉・若狭井・三月堂・手向山・三笠山・春日社・若宮・大御堂		
34	天保7年 (1836)	○	88文定メ	3人カ	順礼道中日記(『天理参考館報』11)
			猿沢池・春日社・三笠山・二月堂・大仏殿・南円堂・興福寺・元興寺		
35	天保9年 (1838)	○	150銅	1人	大和巡日記(『日本庶民生活史料集成』2)
			浅香山・猿沢池・采女宮・八重桜・衣掛柳・大御堂・春日社・若宮・三笠山・手向山・東大寺・三月堂・二月堂・若狭井・鐘楼・大仏殿・轟橋・飛火野・氷室社・興福寺・南円堂・元興寺		
36	天保11年 (1840)	○	124文	4人カ	道中記(『宮崎平左衛門伊勢参宮道中記』クギヤ印刷所)
			大仏殿・二月堂・三笠山・興福寺		
37	天保11年 (1840)	○	同行中間ニて88文ツゝ		伊勢参宮道中帳(『梁川町史資料集』27)
			御霊神社・元興寺・猿沢池・采女宮・衣掛柳・春日社・若宮・二月堂・三月堂・四月堂・鐘楼・大仏殿・興福寺・南円堂		
38	天保12年 (1841)	○		21人	伊勢参宮日記(『加須市史』資料編Ⅰ)
			猿沢池・采女宮・衣掛柳・大御堂・春日社・若宮・八幡宮・三月堂・二月堂・四月堂・鐘楼・大仏殿・興福寺・南円堂		
39	天保12年 (1841)	×		14人	伊勢参宮日記(世田谷区『伊勢道中記史料』)
			春日社・若宮・八幡宮・三月堂・二月堂・鐘楼・三笠山・大仏殿・興福寺・氷室社・南円堂		

No.	年代	案内人	案内賃	同行	出典史料名
			見　物　場　所		
40	天保12年 (1841)	×			西国順礼道中記(『岩槻市史』近世史料編Ⅳ)
			猿沢池・衣掛柳・八重桜・大御堂・春日社・若宮・三笠山・三月堂・二月堂・四月堂・鐘楼・大仏殿、「名所数多不残参詣仕候」		
41	天保12年 (1841)	×		11 人	伊勢参宮道中日記帳(『会津高郷村史』Ⅰ)
			春日社・大仏殿・二月堂・南円堂・興福寺・三笠山・手向山		
42	天保12年 (1841)	×		11 人	伊勢道中日記控(『神奈川大学日本常民文化叢書』6)
			春日社・大仏殿・元興寺		
43	天保12年 (1841)	×		11 人	伊勢道中日記(『桶川市史』4)
44	天保13年 (1842)	○	150 文	不明	伊勢道中日記覚(『志木市史』近世資料編Ⅲ)
			南円堂・春日社・東大寺・若宮八幡宮		
45	天保14年 (1843)	×			太々講参宮道中日記帳(『藤沢市史』2)
			春日社・大仏殿		
46	弘化2年 (1845)	○	40 文		伊勢参宮覚(『伊勢道中記史料』世田谷区教育委員会)
			大仏殿・春日社・三笠山・手向山・鐘楼・八重桜・衣掛柳・大御堂・南円堂		
47	弘化2年 (1845)	○	150 文	不明	伊勢参宮日記帳(『岩井市史』資料近世編Ⅱ)
			南円堂・四月堂・大仏殿、「其外宮之参詣仕候」		
48	弘化2年 (1845)	○		4 人	西杖日記(『土浦市史資料』1)
			春日社・二月堂・若狭井・八重桜・良弁杉・宝蔵		
49	弘化5年 (1848)	○			伊勢参宮献立道中記(『日本庶民生活史料集成』20)
			春日社・若草山、「処々見物仕すまし」		
50	弘化5年 (1848)	○		4 人	伊勢道中記(『泉南市史』史料編)
			猿沢池・興福寺・東大寺・大仏殿・二月堂・若草山・春日社		
51	弘化5年 (1848)	○	何人ニ而も 88 文	12 人	神路山詣道中記(『神路山詣道中記』随想舎)
			元興寺・猿沢池・衣掛柳・采女宮・八重桜・大御堂・春日社・八幡宮・三月堂・二月堂・四月堂・花の松・鐘楼・良弁杉・大仏殿・南円堂・興福寺		
52	嘉永2年 (1849)	○		4 人	道中日記(『青梅市史史料集』52)
			猿沢池・采女宮・衣掛柳・八重桜・春日社・若宮・二月堂・三月堂・四月堂・若狭井・大御堂・大仏殿		
53	嘉永2年 (1849)	×			見聞日記(『新編高崎市史』資料編8)
			景清門・大仏殿・鐘楼・若狭井・南円堂・興福寺・猿沢池・衣掛柳・楊貴妃桜・采女宮・春日社・三月堂・手向山八幡宮・東大寺・元興寺		
54	嘉永3年 (1850)	○	十壱人にて 180 文	11 人	伊勢参宮道中記(『日本庶民生活史料集成』20)
			猿沢池・衣掛柳・八重桜・若宮八幡・春日社・三笠山・三月堂・二月堂・四月堂・大仏殿・鐘楼・南円堂		
55	嘉永5年 (1852)	○			道の記(『伊勢道中記史料』世田谷区教育委員会)
			大仏殿・春日社		
56	嘉永5年 (1852)	○	100 文	9 人	道中入用日賀得(『新編高崎市史』資料編8)
57	嘉永5年 (1852)	○	1 組ニ付 80 文	13 人	道中日記(『所沢市史』近世史料Ⅱ)
			猿沢池・衣掛柳・扇の芝・南円堂・興福寺・一乗院・花の松・大乗院・大仏殿・鐘楼・二月堂・三月堂・四月堂・春日社・三笠山・元興寺		
58	嘉永5年 (1852)	×		3 人	道中記(『平鹿町史料集』2)
			春日社・二月堂・三笠山・大仏殿・南円堂・猿沢池		
59	嘉永5年 (1852)	×		16 人	道中日記帳(『相模原市立図書館古文書室紀要』11)
60	嘉永6年 (1853)	○	88 文	18 人	道中記(『北上市史』12)
			春日社・大仏殿・南円堂、「其外名所旧跡沢山、奈良神信社広き事難尽申候」		
61	嘉永6年 (1853)	○	12 人ニて 88 文	12 人	伊勢西国道中録(『海上町史研究』29)
			南円堂・東大寺・大仏殿・春日社・若宮・鐘楼		
62	嘉永6年 (1853)	×		3 人	(仮題)伊勢参宮并金毘羅参詣道中記(『二戸史料叢書』6)
			東大寺・春日社・大仏殿・南円堂・猿沢池		
63	安政元年 (1854)	○	88 文		四国八拾八ヶ所日記帳(『岩槻市史』近世史料編Ⅳ)
			元興寺・猿沢池・衣掛柳・采女宮・八重桜・扇の芝・興福寺・南円堂・四月堂・二月堂・三月堂・手向山八幡宮・三笠山・春日社		

No.	年代	案内人	案内賃	同行	出典史料名
			見　物　場　所		
64	安政3年 (1856)	○	88文　拾三人納	13人	西国道中付(『中津村史』史料編上巻)
65	安政3年 (1856)	○		不明	西騎旅録(『両津市誌』資料編)
			景清門・四月堂・三月堂・二月堂・大仏殿・三笠山・八幡宮・春日社・猿沢池・八重桜・南円堂・興福寺		
66	安政3年 (1856)	○		6人	金毘羅参詣道中日記(『国立歴史民俗博物館研究報告』4)
			大仏・二月堂・春日社		
67	安政3年 (1856)	×			西国道中日記帳(『海上町史研究』29)
			南円堂・猿沢池・興福寺・大仏殿・鐘楼・二月堂・春日山・三笠山・春日社・若宮		
68	安政4年 (1857)	○	1組ニ付150文		伊勢参宮道中記(『所沢市史』近世史料Ⅱ)
			春日社・大仏殿・鐘楼・元興寺・三笠山・手向山・猿沢池・南円堂・八重桜		
69	安政4年 (1857)	×			道中記(『二戸史料叢書』6)
			南円堂・猿沢池・興福寺・春日社・手向山・東金堂・花の松・大仏殿・鐘楼・二月堂・三月堂・四月堂		
70	安政4年 (1857)	×		3人	道中日記扣ヱ(『政えんどんの旅日記』静岡古文書研究会)
			猿沢池・衣掛柳・八重桜・南円堂・大仏殿・二月堂・三月堂・四月堂・良弁杉・角細工所・三條小鍛冶・春日社・若宮		
71	安政4年 (1857)	×			道中日記帳(『福生市史』資料編近世3)
			「春日社より三かさ山有、大仏、正月より四月迄の宮有、猿沢池・衣掛柳・かささぎの橋、七堂伽藍」		
72	年記ナシ 安政5年 (1858)ヵ	○		16人	伊勢道中日記帳(『福生市郷土資料室年報』Ⅳ)
			采女宮・猿沢池・衣掛柳・南円堂・花の松・春日社・三笠山・八幡宮・二月堂・三月堂・鐘楼・大仏殿		
73	安政6年 (1859)	○	150文		伊勢奈良大坂金毘羅京都善光寺道中日記手控(『岩槻市史』近世史料編Ⅳ)
			春日社		
74	安政6年 (1859)	○	80文	9人	道中日記帳(『戸田市史研究』10)
			南円堂・猿沢池・大御堂・三笠山・春日社・二月堂・鐘楼・大仏殿・三月堂・四月堂		
75	安政6年 (1859)	×		4人	伊勢参宮并熊野三社廻り金毘羅詣道中道法附(『二戸史料叢書』6)
			春日社・二月堂・大仏殿・南円堂・猿沢池・三笠山・大御堂		
76	年記ナシ 安政末頃ヵ	○	何人ニ而も88文	7人	(仮題)安政末年伊勢参宮道中記(『奈良史学』26)
			猿沢池・衣掛柳・大御堂・春日社・若宮・三笠山・三月堂・二月堂・鐘楼・大仏殿・興福寺・花の松・南円堂		
77	文久元年 (1861)	○			さかきのかをり(『新修橘曙覧全集』)
			大御堂・春日社・三笠山・八幡宮・氷室社・東大寺・大仏殿・二月堂・興福寺・南円堂		
78	文久2年 (1862)	○	150文	3人	参宮道中諸用記(『本荘市史』史料編Ⅳ)
			東大寺・猿沢池・春日社・二月堂・三笠山		
79	文久3年 (1863)	○	7人ニて78文	7人	伊勢参宮道中記(『梁川町史資料集』27)
			興福寺・大仏殿・四月堂・二月堂・三月堂・若狭井・三笠山・春日社		
80	文久3年 (1863)	○	88人　7人前	7人	伊勢道中日記(『茅ヶ崎市史』1)
81	慶応2年 (1866)	○	4人にて200文	4人	道中日記蝶(『相模原市立図書館古文書室紀要』11)
			猿沢池・衣掛柳・八重桜・大御堂・若宮・春日社・八幡宮・二月堂・三月堂・大仏殿・興福寺五重塔・南円堂		
82	慶応2年 (1866)	×		12人	道中帳(『二戸史料叢書』6)
			元興寺・猿沢池・南円堂・春日社・鐘楼・大仏殿・南大門		
83	無年記	○	何人て茂88文	8人	(仮題)伝蔵道中記(奈良大学史学科所蔵)
			猿沢池・采女宮・衣掛柳・八重桜・大御堂・春日社・八幡宮・二月堂・若狭井・三月堂・三笠山・四月堂・手向山・大仏殿・鐘楼・南円堂		
84	無年記	○	148文		(仮題)七種出立(『武州多摩郡郷地村道中記』昭島歴史をよむ会)
			東大寺・宝蔵・大仏殿・春日社・元興寺・猿沢池・南円堂		
85	無年記	×			(仮題)勘右衛門道中記(奈良大学鎌田研究室所蔵)
			東大寺・大仏殿・俊乗堂・地蔵堂・宝蔵・三月堂・四月堂・二月堂・若狭井・鐘楼・子安宮・転害門・八幡宮・春日社・若宮・興福寺・猿沢池・采女宮・衣掛柳・楊貴妃桜・大御堂・轟橋		

奈良ニ来レハ猿澤池ニ立寄、奈良案内者ノ教ニ随ヒテ菓子ヲ擲テ鯉鮒等ニアタヘテ其魚ヲ見物ス」という一文が見え、大仏開眼会時には案内人の存在が確認できる。[11]

さらに、大仏殿再建中の宝永五年（一七〇九）に奈良で出された町触の中に、駕籠かき案内の取締りについての規定がみえる。[12]

覚

一奈良町中之駕籠かき共、近年我侭に申合賃銀高直に取、并案内者かさつにて我侭いたし、他所之もの大勢入組、又ハ他所他国へ参博奕なとも仕、案内之仕様も不埒故、旅人等に至まて及難儀候由相聞不届候、依之右為吟味役備前や藤兵衛申付候間、向後藤兵衛差図を請、札を取、駕籠かき案内者可仕候、此以後駕籠かき案内者可仕候、此以後駕籠かき案内之者共仲ヶ間申合、我侭仕候か、札無之して猥ニ駕籠かき案内者ニ罷出候者於在之者可為曲事事

右之通急度町中へ相ふれ可申者也

宝永五子年十月十八日　　町方斗

右之通有之候処、備前や藤兵衛とていつれもへ合点も致たセす、公儀の威をかり申候へとも、御用駕籠かきとも難儀かり、毎日之様ニ御奉行所へ御願申上、其申分相立候故、此儀御ゆるし被成候

これによると、駕籠かき案内者のがさつな行為により旅人が迷惑しているため、備前や藤兵衛を吟味役として、鑑札をとる許可制の導入を命じ、この命に反対した御用駕籠かきを除いて適用されたようである。本史料中の「駕籠かき案内之者共」について、古川聡子氏は、「ガイド的な業務を備えた駕籠かき」とされているが、[13]先述の通り、玉井定時の「大仏開眼会」記録では元禄五年に案内人の存在が確認でき、本史料は「駕籠かきおよび案内人」、すなわち案内業務に携わる者を対象にしたものと解さねばならないのではないだろうか。道中日記類では、駕籠かきが案内をした形跡は確認できない。しかし、駕籠かきが道案内をすることは当然考えられ、案内を兼ねた駕籠かきも存在していたであろう。各町に残る稼業改めなどの記録には、駕籠かきの記述はみられるが、案内人は管見の限り存在しない。ただ、幕末に奈良奉行として赴任した川路聖謨が著した『寧府紀事』の嘉永元年（一八四八）四月二十六日条に、「旅人の名所の案内してくらすもの七十人余あり」[14]とあって、幕末には観光ガイドとしての案内人が確立されていたこと

がわかる。

また、先の触からは、駕籠かき・案内人が奉行所管理の下で営業していたことが読みとれるが、享保十二年（一七二七）の『奈良奉行所町代日記』によれば、奈良奉行所より駕籠かき案内の人数改めがあり、各町の年寄に命じて人数を報告させ、鑑札も返納させている。[15] この時、提出させた札は、駕籠かき案内者札二九四枚、非人番案内札一二枚であった。このうち、観光ガイド的な案内人が何人存在したかは不明であるが、少なくとも数十人単位で存在していたと思われる。また、非人番が案内を勤めていた事実も確認できる。ところが、『奈良町南北触口支配上町代勤務帳』には「細井因幡守様御奉行之節、享保十二未年御止被遊候」[16] とあって、以降鑑札許可制はとられていないようである。しかし、その後も案内人は仲間的な組織を結成していたとみられ、先にあげた『寧府紀事』嘉永元年（一八四八）四月二十六日条に「其頭取を呼出而」、同二年に出された案内人の横暴を糺す町触には、「若不正之儀相聞候ハヽ、当人者勿論案内世話方且町役人迄も吟味之上急度可申付候」[17] とあって、この中の「案内世話方」という語は責任を保証する立場を表し、奈良の案内人は何らかの組織に所属して活動していたものと考えられる。また、現在、ＪＲ奈良駅前に建つ二基の常夜燈のうち、南側の一基に「寺社案内中」の文字が刻まれている。この常夜燈は文久二年（一八六二）の銘を持ち、もとは大坂と奈良を結ぶ暗峠越え奈良（大坂）街道の三条口に設置されていた。基壇には、「産物仲間」「大坂飛脚中」や、「小刀屋善助」「大黒屋吉兵衛」といった奈良の旅籠屋の名前も見え、他にも墨屋や酒屋など、多くの観光業者や商工業者が寄進者に名を連ねている。この寄進銘からも、幕末には観光ガイド的な案内専門業者が存在し、仲間化して営業していたと考えられる。

以上のように、案内人の発生・成立時期は判然としないが、玉井定時の記述から元禄五年（一六九二）には奈良において確実に案内人が存在しており、宝永五年（一七〇九）には駕籠かきおよび案内者に鑑札制を取り入れていることから、宝永年間には旅人の案内をする者が相当数にのぼっていたものと思われる。元禄五年の大仏開眼供養を機に他国人の要請に応じるかたちで、案内を生業とする人たちが誕生したとも考えられ、その後、需要の拡大を当て込み案内業へ参入する者が急速に増加した結果、質の低下が生じ、宝永五年の触の事態に至ったのではないだろうか。大仏殿

の再建工事は、宝永二年（一七〇五）に上棟式が営まれ、先の触が出された宝永五年には、大仏殿もほぼ完成をみており、来る落慶法要を見越しての措置だったとも考えられる。

以上、奈良における案内人の発生と組織についてみてきたが、奈良以外の大和国内においてはどうであったのだろうか。道中日記でみると、奈良以外の寺社や名所の案内人は、寛政九年（一七九七）の『上方一見手引帳』［9］が早い例である。この道中日記では、山辺村で案内を取り、「賃七拾弐文」で山辺赤人の墓を見物し、法隆寺の項では「此所ニ而案内取へし、壱人前六文ツ、也」と記録している。[18] さらに、これよりも早い安永四年（一七七五）の序を持つ、太神講発行の道中案内記に、三輪明神では案内者を雇って参拝するよう勧める記述がみえる。[19]

また、宝暦十年（一七六〇）の道中日記『伊勢参宮道中記』［4］に、「大和廻り高屋山大坂迄、荷物為持召連申候」とあって、荷物持ちを兼ねた道案内を雇って、大和の社寺・名所を巡っている。大坂までの大和めぐり案内人に関しては、享保九年（一七二四）発給の文書にその存在が認められるが、この史料については後出する。

このように、大和では奈良以外の寺社や名所においても、十八世紀半ばには多様な案内人が活動していたといえよう。

二　案内の種類と案内賃

本章と次章では、大和における案内人の活動実態についてみていきたい。道中日記から、大和では、大きく分けて三種類の案内形態が確認できる。まず一つは、奈良町を中心に活動する都市型である。奈良の複数の寺社や名所を、半日あるいは一日かけて案内する、奈良見物のためのものである。大和において、都市型の案内人は奈良にのみ存在している。第二に、寺社の境内や山内をガイドする案内人である。大和では法隆寺や吉野などにみえる。そして第三は、大和の諸社寺・名所を広域にわたって手引きするもので、多くは道案内や荷持ちを兼ねる。本章では、この三種類の案内形態について、具体的に述べる。

1．奈良見物案内人（都市型案内人）

今回、道中日記で確認した奈良での旅人の行動については【表1】に示した。全八十五点の道中日記中、奈良見物

に案内を雇っているものが五十一点、案内人なしで巡っているものが三十二点、不明が二点である。では、案内人の有無により旅人の行動に差異があるのであろうか。まず、見物場所であるが、【表1】で示したように、案内人の有無による差は明確ではない。案内人がいる場合もいない場合も共通して訪れているのは、猿沢池・春日社・大仏・二月堂・南円堂である。猿沢池は采女伝説や月の名所として知られ、春日大社は信仰のみならず、神鹿の存在でも知名である。大仏は元禄期に庶民の協力もあって再興をみており、二月堂は修二会や観音信仰で知られている。また、興福寺は享保二年（一七一七）の火災で伽藍を焼失するが、南円堂は西国三十三所観音霊場の九番札所として庶民の信仰もあり、寛政元年（一七八九）には再建される。これらの社寺・名所は、江戸時代の人々にとっても、全国的に認知されていたのであろう。

但し、道中日記の書き方には精粗があり、巡った場所すべてを記録したとも限らない。おそらく旅人の関心を惹き、印象に残ったことが記録されるであろうから、それ以外の場所については「一々覚難ク委細者絵図ニ有」[36]、「名所数多不残参詣仕候」[40]、「其外名所旧跡沢山」[60]などと省略している場合も少なくない。大仏や春日社、猿沢池などが多く書き残されているのは、その大きさや、鹿・燈籠の数、景色のよさなどが印象に残りやすいためであろう。ただ、文化十四年（一八一七）に訪れた三井清野のように、大仏についてまったく触れていない例[19]もある。その意味においては、案内人を雇ったにもかかわらず、記録されていない場合のあることを十分に考慮しなければならない。

また、案内人の記載のない道中日記のほうが由来などの説明について詳述されている感もある。これは、多くの旅人は道中案内記を入手し、それを参考にしながら名所を巡っており、道中日記の記述もこれに基づいていると推察される。したがって、案内記に頼り、案内人を必要としなかったケースも考えられる。道中日記から案内人引率の有無を確定するのは難しいが、土地に不案内な旅人が限られた時間内で確実に効率よく名所を巡り、しかもより多くの情報を得ようとすれば、案内人を雇うのが最も確実で、案内人を利用する旅人が多かったのではないだろうか。

では、案内人を雇った場合の見物経路であるが、道中日記の記述によって順路を特定するのは難しいが、一定の

コースパターンはあるように思われる。共通しているのは周遊していることである。そして、旅人が奈良に入ってくる街道や、宿泊する宿屋の位置によって起点が変わっている。大坂・初瀬方面から入ってきた旅人は、猿沢池から春日社・東大寺・興福寺と廻り、京都方面からの旅人は、東大寺から春日社を経て猿沢池・興福寺と、大坂・初瀬方面からの場合とほぼ逆回りで巡っている。これは街道ごとに奈良町の入口付近で案内人が営業していたと推察され、また、この起点となる猿沢池畔・東大寺転害門付近は、宿屋町が形成されており、宿屋との関連性もうかがわれる。

経路の設定については、宝暦十一年（一七六一）刊行の案内記『七ざい所道しるべ旅行便覧』に、次のような記述が見える。[20]

奈良、此所拝所見所おびたゝしき故、案内者無てハかなひがたし、然ども按内者まかせにしてハ見所をはづす事あり、宿に着て早速按内者をよびて案内すべき道筋の次第をいひ合たるがよし、さる沢の池より初て春日の御社東大寺邊までの道筋を一紙に印行にしたる有、是大方の人めぐる道筋なり、先是を買て其後に按内者に道筋の次第を聞べし、此一紙にのせざる所をも見ばやとおもふ人ハ弥按内者にいひ合べし

奈良見物においては案内人を雇い、絵図等を購入して、希望などを告げ、よく打ち合わせた上で経路を決めることが肝要としている。さらに、「宿ハさる沢の池の端よし」とあり、「是より見巡次第」として「さる沢の池」「采女の宮」「きぬかけ柳」「菩提院」「興福寺」「春日大明神」「東大寺」の順に紹介し、「是より猿沢の池の方へ帰」、続けて「元興寺」「猿沢の池より初て、此邊迄大方の人のめぐる道筋なり」とあることから、猿沢池畔に宿泊し、宿を起点として周遊するのが最も一般的なコースとされていたようである。案内人は、このようなコースを基本とし、旅人の要望に合わせてガイドしたのであろう。

さらに、案内賃についてみてみると、最高額が文化四年（一八〇七）の二百五文［11］、最低額が文政十三年（一八三〇）の五文［28］である。これら値段の相違は、単に、時代的な物価の差とは言えないようである。では、どのような要因によるものなのか。まず、人数の問題である。最高額の［11］の人数は明確ではないが、おそらく五人、最低額の［28］は九人である。しかし、［28］は「壱人前に五文つゝ出し」とあって、一人分の値段だとわかる。最高

額の二百五文が五人分であったとすれば、一人前四十一文で、突出して高い額とはいえない。ほかに「何人成共八十八文」[9]、「何人ニ而代百文」[22]、「一組ニ付八十文」[57]、「一組ニ付百五十文」[68]、「四人にて二百文」[81]などの記述が見え、人数に関係なく一グループごとに値段が決められている場合が多い。したがって、値段の差がそのまま人数に反映されているとは言い難い。

次に見物場所の数や距離及び時間と料金との関係であるが、これも【表1】に示した通り、見物箇所と案内賃の相関関係は証明し難い。ただ、先に示した『七ざい所道しるべ旅行便覧』に掲げられた如く、基本となるコースに旅人の希望箇所を追加したような場合には、高額になった可能性は考えられる。時間に関しては、ほとんどの旅人は奈良見物に半日を費やしている。案内人を雇った例では、五ツ前に案内を頼んで宿屋を出発し、見物後、宿へ戻り昼仕度をしていたり[52]、朝案内を雇い、九ツ時宿屋に戻っていたり[76]、「半日逗留いたし」[61]、などの記述が見え、奈良入りした当日の午後、あるいは翌日の午前中に見物している例が多い。しかし、これも金額との関係を明確にするには至らない。また、案内人の経験や解説内容で金額差が生じたことも考えられる。天保九年（一八三八）『大和巡日記』[35]を記した安田相郎は「此地にても壱番こふしや（巧者）なる手引」を雇い、基本的なコースを巡覧しているが、支払った額は百五十文で、一人分の値段としてはやや高いといえるだろう。

道中日記では、とくに八十八文の支払い例が多数認められ、天保七年（一八三六）の道中日記[34]には「八十八文定メ」とある。また、浪華講の定宿帳類には六十四文の数字が頻出することから、[21]一定の組織に加入していたり、講や宿屋などと提携している案内人の場合には、定められた均一の値段で営業していたと推察される。後に詳述するが、案内人と宿屋は密接な関係にあり、宿屋が案内人を斡旋する行為もみられ、案内賃の金額差は、仲介者の有無によって生じていることも考えられる。また、奈良では路上で客引きをする案内人も存在しており、料金や見物内容は相対によって決定する場合が少なくなかったのではないだろうか。

2．寺社境内・山内案内人

大和においては、【表2】に示したように、法隆寺・当麻寺・

【表 2】道中日記にみる大和の寺社･名所における案内賃

案内賃の記載のないものは空欄とした。史料名欄の［　］内の数字は、【表 1】の番号を示す。

寺社･名所名	年　代	案 内 賃	史　料　名［表 1№］
法隆寺	寛政 9 年(1797)	壱人前 6 文ツ、	上方一見手引帳［9］
	文化 4 年(1807)		伊勢道中日記［11］
	文化 10 年(1813)	6 分 5 厘	海陸道順達記［15］
	文化 14 年(1817)	48 文	道中日記［19］
	文政 11 年(1828)	64 文	伊勢参宮紀行［26］
	天保 11 年(1840)	十人迄 48 文ツ、	伊勢参宮道中帳［37］
	弘化 2 年(1845)	16 文	伊勢参宮覚［46］
	弘化 5 年(1848)		伊勢道中記［50］
	嘉永 5 年(1852)	24 文	道中入用日賀得［56］
	安政 3 年(1854)	12 文	金毘羅参詣道中日記［66］
	安政 5 年(1856)ヵ		伊勢道中日記帳［72］
	安政 6 年(1857)	32 文	道中日記帳［74］
当麻寺	嘉永 2 年(1849)		道中日記［52］
	文久 2 年(1862)	24 文	参宮道中諸用記［78］
多武峯	文政 5 年(1822)	何人ニ而も 32 文	伊勢参宮并大社拝礼記行［21］
	嘉永 2 年(1849)		道中日記［52］
三輪	明和 4 年(1767)		上方道中記［5］
	無年記		(仮題) 勘右衛門道中記［85］
長谷寺	安政 5 年(1856)ヵ		伊勢道中日記帳［72］
吉野	文政 5 年(1822)	何人ニ而も 24 文	伊勢参宮并大社拝礼記行［21］
	文政 9 年(1826)		山海日記［23］
	文政 10 年(1827)	壱人文 2 文ツ、	伊勢参宮道中記［25］
	天保 9 年(1838)		大和巡日記［35］
	嘉永 2 年(1849)		道中日記［52］
	嘉永 5 年(1852)	24 文ツ、	道中入用日賀得［56］
	安政末頃ヵ	何人ニ而も 32 文	(仮題)安政末年伊勢参宮道中記[76]
	文久 3 年(1863)	24 文　7 人分	伊勢道中日記［80］
大峰	天保 9 年(1838)	明日明後日両日にて1貫文	大和巡日記［35］
	嘉永 6 年(1853)	12 人ニて 200 文	西国道中録［61］
	嘉永 6 年(1853)	壱人前 141 文	(仮題)伊勢参宮并金毘羅参詣道中記[62]
	安政 3 年(1856)	13 人ニ而 200	西国道中日記帳［67］
	文久 3 年(1863)	山案内 7 人ニ而 2 朱	伊勢参宮道中記［79］

多武峰・三輪・長谷寺・吉野山・大峯山に、境内あるいは山内を案内する者の存在が確認できる。なかでも、法隆寺と吉野では多くの旅人が案内を雇っている。境内における案内人は、寺社と関連して活動したと考えられるが、道中日記では案内人が寺社の下で活動していたのか、あるいは別の組織として営業を行っていたのか定かではない。ただ、宿屋等との関連をうかがわせる記述が散見で

きる。弘化二年（一八四五）の道中日記［46］に「大黒屋方よりあん内つれほうりう寺廻り」、安政五年（一八五八）の道中日記［72］では長谷寺参詣時に「泊やニて案内おつれ」とあって、さらには安永四年（一七七五）の太神講発行『伊勢道中記』では三輪の定宿として「薬種や半四郎」をあげ、「半四郎にてあん内者をやとひて参るべし」[22]と、宿屋で案内人を手配するよう促している。また、多武峰では「御門前茶屋あり、休むべし、此処より案内人同行」［21］、「多武峰江裏手大門前茶屋ニて女人江案内頼」［52］とあって、茶屋で案内を雇っている。とくに［52］の旅人は女性ということもあり、女人禁制の多武峰では女人道への案内を請うている。これらの記述から、境内の案内人は寺社方ではなく、民間業者として宿屋や茶屋と連携しながら活動していたと考えられる。[23]

また、吉野や大峰においては、案内料や先達料とは別に山役銭を支払っているケースもみられ［79］、宿坊との関連がうかがえる。その他、吉野では「此橋袂ノ茶屋二階屋清五郎ニ荷物預ケ案内ヲ頼ミ」［25］というように、山麓の上市で案内を雇い吉野へ向かっている例もある。吉野山では、ほとんどの旅人が、銅の鳥居・仁王門・金峯山寺・吉水院・勝手神社の順に巡っており、巡覧コースが定型化していたようである。

3．大和めぐり案内人（広域型案内人）

大和の社寺・名所を巡り、広域的に誘導する案内人は、享保期には存在していたようである。『町田市史』上巻には、享保九年（一七二四）に伊勢参宮後大和めぐりに向かう一行宛に、奈良の文珠四郎から発行された案内に関する文書が掲出されている。[24]

相定申大和案内之事

一奈良より法花寺西大寺照提寺、西京法隆寺龍田当麻寺達磨寺三輪明神初瀬多宇ノ峯、吉野蔵王権現吉水院勝手明神高野山、和泉堺妙国寺夷嶋住吉大明神、大坂天王寺道頓堀日本橋迄急度御供可仕候、此日用代九百文ニ相究メ当分爰元ニ而三百文請取、残ル処道中入用次第ニ御借シ可被下候、若此者道中ニ而無沙汰候ハ、我等罷出急度埒明可申候、為其一札如件

享保九年辰二月三日　　南都文珠四郎　包常作右衛門㊞

日用　又四郎

武州多麻郡野津田村
清太夫様

この文書によれば、文珠四郎包常方より日用の又四郎を、奈良から高野山・大坂まで従者として派遣し、その費用を九百文と取り決めている。ここに記された法華寺以下吉野山までは、いわゆる「大和めぐり」のコースである。大和めぐりに出かけるにあたって、道案内を目的に雇われたものであろう。文書の差出人であり、案内人又四郎の主人的な立場である文珠四郎包常作右衛門については、貞享四年（一六八七）刊行の『奈良曝』、享保二十年（一七三五）刊行の『奈良坊目拙解』に、西寺林町に居住の小刀鍛冶として「文珠四郎包常」の名が記載されているので、[25] この作右衛門も小刀鍛冶であろう。[26] 小刀鍛冶が案内を派遣していた事実はこの文書以外に確認できないが、享保期には大和めぐりの案内を業とする者が活動していたことは明らかである。

大和めぐりに際して、案内人の記述がある道中日記の行程・案内賃については【表3】にまとめたが、これをみると、見物場所や経路はほぼ一定しており、大和めぐりのコースができあがっていたことがわかる。基本は、奈良を起点として、法華寺・西大寺・菅原天満宮・唐招提寺・西の京・郡山・法隆寺・龍田神社・達磨寺・石光寺・当麻寺・飛鳥神社・橘寺・岡寺・三輪・長谷寺・安倍文殊・多武峰・吉野を見物し、高野山・堺・住吉を経て大坂へと向かう。なかには、法隆寺や当麻寺で大坂までの案内人を雇っており［33］［57］、奈良のみならず途次の宿場などにも大和めぐりの案内人が存在していたようである。また、文化十年（一八一三）『海陸道順達記』［15］には、「宿元御亭主と相談いたし、大和めぐりニ付、ならへ罷越ス積りニて、今日爰元出立。則久利出入之伊兵衛ヲ案内者として、昼時分大坂ヲゾ発足いたし」とあり、大坂の逗留宿久宝寺屋利兵衛にて大和めぐりの案内人を世話してもらっている。五月二十七日に大坂を立ち、暗越えで奈良に入って、奈良ではさらに案内人を雇って奈良見物をし、多武峯・初瀬・三輪を巡り、法隆寺・西の京を廻って、西大寺より歌姫越えで宇治へと向かう。そして、六月四日に京都到着、「此間中、大和めぐり案内として頼ミツル摂州之仁一礼申入、今朝大坂へこそ相返しケリ」と記されていて、大坂の案内人が大和めぐり、さらには京都までをも活動範囲としていた事実が認められる。

【表 3】道中日記にみる大和めぐりの見物地と案内賃

案内を雇った場所を起点とし、最終契約地を終点とした。日付は起点～終点までを示した。
同行者の人数は大和めぐり出発時の人数を示す。史料名欄の［　］内の数字は、【表 1】の番号を示す。

日　付	案 内 賃	同行	起点～終点	史料名［表 1№］
	見　物　地　・　経　由　地			
宝暦10年(1760) 5/26～6/2(7日)	1朱100文	8人	奈良～大坂	伊勢参宮道中記全[4]
	(奈良見物)・法華寺・西大寺・唐招提寺・薬師寺・郡山・小泉・法隆寺・龍田・石光寺・当麻寺・安倍文殊・高取・壺坂寺・橘寺・飛鳥・岡・多武峯・吉野・六田・橋本・高野山・槙尾寺・藤井寺・堺・住吉・四天王寺			
寛政9年(1797) 1/24～1/30	2貫文外ニ酒手200文	6人ヵ	奈良～大和廻り～大坂	上方一見手引帳[9]
	眉間寺・聖武天皇陵・興福院・法華寺・西大寺・菅原神社・唐招提寺・薬師寺・郡山・小泉・法起寺・法隆寺・龍田・達磨寺・石光寺・当麻寺・高田・安倍文殊・飛鳥・橘寺・岡寺・多武峯・吉野・橋本・高野山・堺・住吉・四天王寺			
文化10年(1813) 5/27～6/4			大坂～奈良～大和めぐり～京都	海陸道順達記[15]
	暗峠・奈良(奈良見物)・在原・丹波市・多武峯・長谷寺・三輪・法隆寺・郡山・薬師寺・菅原神社・西大寺・祝園・玉水・長池・宇治			
文政6年(1823) 2/18～2/24	12人ニ而2貫文	12人	奈良～大坂	伊勢参宮旅日記[22]
	(奈良見物)・法華寺・西大寺・菅原神社・唐招提寺・薬師寺・郡山・小泉・法隆寺・龍田・達磨寺・石光寺・当麻寺・高田・橘寺・岡寺・飛鳥・安倍文殊・桜井・三輪・長谷寺・多武峯・吉野・五条・橋本・高野山・三日市・堺・住吉・天下茶屋			
天保4年(1833) 1/23～2/1(9日)	3貫500文		奈良(奈良見物)～大坂	参宮日記帳[31]
天保6年(1835) 2/3～2/8	1貫500文		奈良(奈良見物)～大坂	伊勢参宮日記[32]
天保6年(1835) 3/21～3/26	壱人前ニ付124文	12人	当麻～大坂	道中記覚[33]
	高田・八木・三輪・初瀬・安倍文殊・飛鳥・多武峯・吉野・五条・橋本・高野山・橋本・三日市・堺			
嘉永5年(1852) 1/23～1/30	10人ニ而1貫200文	10人	法隆寺～大和廻り～大坂	道中日記[57]
文久3年(1863) 7/29ヵ～8/5	7人ニ而2貫400文	7人	奈良～七在所巡り～大坂?	伊勢参宮道中記[79]
	法華寺・西大寺・菅原神社・唐招提寺・薬師寺・郡山・小泉・法隆寺・龍田・達磨寺・石光寺・当麻寺・八木・三輪・長谷寺・多武峯・吉野・六田・橋本・高野山・三日市・堺・住吉・天下茶屋			
無年記 1/28～(後欠)	金□分ト500文		奈良～大和廻り～大坂	(仮題)七種出立[84]
	法華寺・西大寺・菅原神社・薬師寺・法隆寺・龍田・達磨寺・石光寺・当麻寺・飛鳥・安倍文殊・三輪・長谷寺・多武峯・吉野・宇野・橋本・高野山			

大和を遊覧する人たちの多くは伊勢参宮者であり、大和へは参宮後、名張越えの伊勢表街道（あお越え）で初瀬方面より入るか、伊賀越えで木津方面から入るか、あるいは参宮の後、田丸より西国巡礼をしながら葛井寺を経て岩屋越えで当麻方面から入ってきている。このうち、西国巡礼者は六番壺阪寺から九番南円堂まで札所を辿るかたちで進むため、大和めぐりの案内人を雇った形跡は認められない。

宝暦十一年（一七六一）刊行の案内記『七ざい所道しるべ旅行便覧』によれば、「奈良より大坂までの按内

者を荷持を兼てやとひてつれたるが道すじの案内のみならず泊休の宿等をも能知て居故に何かに能なり」[27]とあって、大和めぐり案内人は、道案内と荷物持ちを主業としている。道中記でも「大和廻りの案内大坂迄荷物持セ」[84]などの記述がみえ、都市型や境内の案内人には無い役目を負っている。

文政六年（一八二三）の道中日記［22］では「此所ニ而大坂迄案内願拾弐人ニ而弐貫文ニ而、外ニ大仏堂より春日大明神猿沢の池見物案内ハ何人ニ而代百文」と記述されており、大和めぐりの案内とは別に、奈良で案内を雇っている。また、寛政九年（一七九七）の道中日記［9］では、奈良で「大和廻り大坂迄案内取申候」としながら、法隆寺では境内案内人を得ており、大和めぐり案内人は、見物地の社寺や名所について由来などを語る、都市型や境内案内人とは役割を異にしている。

大和めぐりは、奈良より大坂まで数日におよぶ。道中日記では、六日から九日を費やして遊覧している。この間、案内人を連れ巡った場合、その宿泊等の経費は旅人の負担となる。先に掲げた享保九年の文書では、案内人の代金は九百文で契約しているが、三百文はあらかじめ文珠四郎包常に支払い、残りは「道中入用次第ニ御借シ可被下候」となっている。この文書からは、案内人は文珠四郎包常から手配され、手数料として三百文を納入し、案内にかかわる実費はその都度負担していたことがわかる。さらに［32］は、二月三日に奈良で「是より大坂迄之間五六日分案内を頼申候、但し大坂迄案内賃壱貫五百文」で契約し、大和めぐりの後、八日大坂の宿屋到着時に「此所ニて奈良案内壱貫五百文賃銭払相返し申候」と、代金を清算している。この場合、案内賃は案内人に直接支払われている。こうした後払いシステムは、道中での経費があらかじめ契約した料金内に収まらなかった場合を想定しての設定であろう。加えて、途中での案内放棄など、トラブル回避の目的もあったと思われる。また、安政六年（一八五九）の道中日記［73］では、二月十一日に岡寺にて「吉野迄案内頼、賃三百文、尤同行之荷ヲ持」、翌十二日「前日之案内吉野よりかむろ迄案内頼、賃壱朱ト百文」と記されており、一日ごと部分的に契約し、数日にわたって案内を雇っている例もみられる。このように、大和めぐりの案内人の料金は、日数による経費に応じて増減し、また、荷持ちを兼ねることから、旅人の人数あるいは荷物量が料金に反映されたものと考えられる。

【表 4】その他の案内

史料名欄の［　］内の数字は、【表 1】の番号を示す。

日　付	案内賃	起点～終点	見物・経由地	史料名［表 1№］
寛政9年(1797)1/22	72文	山辺	山部赤人墓	上方一見手引帳[9]
文化10年(1813)6/16		名張～奈良	笠間・馬場	海陸道順達記[15]
天保12年1841)1/22		奈良～法華寺		伊勢道中日記控[42]
嘉永2年(1849)1/25	100文	法華寺～薬師寺	西大寺・菅原神社・唐招提寺・薬師寺	見聞日記[53]
嘉永2年(1849)7/9～7/10		奈良～名張	鹿野園・鉢伏・田原・杣ノ川・馬場・小原・笠間	道中日記[52]
嘉永5年(1852)4/8		奈良～法華寺		道の記[55]
嘉永5年(1852)1/21		大野～山辺?		道中日記［57］
安政6年(1857)2/8		奈良～法隆寺	法華寺・西大寺・唐招提寺・薬師寺・菅原神社・郡山・小泉	道中日記帳[74]
安政6年(1857)2/11	300文	岡寺～吉野	多武峯・吉野	道中日記手控[73]
安政6年(1857)2/12	1朱ト100文	吉野～学文路	宇野・橋本	道中日記手控[73]

そのほか大和を部分的に手引きする道案内人の存在が確認できる【表4】。嘉永二年（一八四九）の『見聞日記』［53］では薬師寺の項に「法花寺より是迄、法花寺の文サント云人安内ニ頼ム、代百文」と記されており、安政六年（一八五九）の道中日記［74］では奈良で「案内頼ミ、法け寺、西大寺、正大寺、西の京、すが原天神、郡山城下、小泉庚申、法りう寺」と廻っている。

嘉永二年（一八四九）の『道中日記』［52］では、奈良見物の後、鉢伏・笠間越えで名張へ出ているが、その道中は奈良で得た案内人に誘導されている。同様に『海陸道順達記』［15］では、参宮の帰路に名張から奈良まで「此名張の宿のせわヲ以テ案内壱人」を雇っている。これは名張やその近辺にも奈良までの道案内を生業とする者が存在したことを示しており、大和めぐりに限らず、大和周辺には奈良へと誘導する案内人が存在していたと考えられる。

三　案内のシステム

前章で大和における案内人と宿屋との関連を指摘した。道中日記からは、案内人が宿屋によって斡旋されていたこ

とをうかがわせる記事が多数見受けられる。本章では案内人とそれを斡旋・仲介していた業者との関係をみていく。

奈良における案内人の場合、弘化二年（一八四五）の『伊勢参宮覚』［46］に「井とくいや方より案内人をつれまはりけり」とあって、宿泊先で案内人を調達している。また、嘉永六年（一八五三）『伊勢西国道中録』［61］では「南良（奈良）泊り中喰代案内賃共弐百八拾七文」という記述がみえ、宿泊・昼食をした宿屋で案内人を雇い、支払いをしたことがわかる。加えて、浪花講では「小刀屋善助」を奈良の定宿として指定し、「案内者右小刀やニて頼べし」と定宿帳で紹介している。[28]

また、弘化二年の『西杖日記』［48］では「長谷の上田屋さし図にて、三角町升屋伊右衛門へ舍り求るに、去りがたき差合有て、綱屋市兵衛へ案内して泊り、升屋に長谷の上田屋亭主居合せて、かれこれ案内者などたのみ呉」と記されており、宿泊予定の升屋伊右衛門ではなく、綱屋市兵衛に宿泊したにもかかわらず、案内人は升屋に世話してもらっている。文政十年（一八二七）『伊勢参宮道中記』［25］でも「天カイ町豆腐屋庄七宅ヨリ案内ヲ頼ミ」「天海町豆腐屋指図ニテ塩屋長兵衛方ニ泊リ」とあって、宿泊先とは別の宿屋で案内を手配している。さらに、年記を欠くが［84］の道中日記では「景清門奈良や嘉兵衛といふ者ニ休ミこゝニ而案内を頼ミ」と、昼食を摂った宿屋で案内を雇っている。これらの記述は、宿泊者に限らず宿屋で案内の依頼ができたことを示している。

このようなことから、奈良見物の案内人は宿屋によって斡旋されていたことは明らかである。しかしながら、案内人と宿屋との関係は判然としない。宿屋が案内業を兼業していた、あるいは宿屋の従業員を案内人として派遣していたという見解も成り立つが、先述のように、奈良の案内人は仲間的な組織に属して活動していたとみられることから、宿屋が案内人と提携するかたちで旅人を斡旋していたと考える。

また、安政三年（一八五六）の『西騎旅録』［65］では、木津で昼食後、奈良に入り案内人を雇って奈良見物をし、その夜は郡山で宿泊しており、奈良で宿屋に立ち寄った形跡はない。しかしながら、案内を得て奈良見物をしている。これは、宿屋に関わりのない案内人が存在したということではないだろうか。橘曙覧が文久元年（一八六一）に奈良を訪れた折に案内を雇って見物しているが、その紀行文『さ

かきのかをり』［77］に次のような一文がある。[29]

猿沢の池きよらかなり。衣かけの柳といふあり。此ほとりにせうやうしをる程あないする事をわざとするものの一人きて、あないさせよといふ。やがてそれやとひて、さきにたたせ行。

この文章は、猿沢池畔で客引きをする案内人が存在したことを示している。いわば「流し」の案内人である。奈良においては、宿屋の仲介によらずとも案内人を雇うことは可能であった。ただ、流しの案内人も、宿屋の要請があれば、宿屋から客をとった可能性は考えられる。

境内・山内案内人に関しては、前章二節で述べた通り、法隆寺・長谷寺・三輪神社で宿屋による案内人の手配が確認され、多武峯では茶店で案内を依頼している。

大和めぐりの案内人については、宝暦十年（一七六〇）の『伊勢参宮道中記』［4］に次のような記述がある。[30]

なら出立之節、吉兵衛と申者壱人金壱歩百文に雇宿紅鶴や新蔵より始末手形請取、大和廻り高屋山大坂迄、荷物為持召連申候

この記述からは、案内人が宿屋を介して雇われていたことが読みとれるが、ここに記された宿紅鶴や新蔵は木銭宿であり、旅籠に限らず木銭宿をも含む宿泊施設で、案内人を斡旋していた事実が判明する。嘉永五年（一八五二）の道中日記［57］では法隆寺で大坂迄の案内を雇っているが、「かせやの内より大和廻りて大坂迄、拾人ニ而代一貫貳百文ニ而案内取、證文受取、是より荷物持せ行なり」とあって、これも宿屋で案内人と契約を行っている。また、先述の文珠四郎包常のケースのように、土産物屋などが案内人を斡旋する行為も認められる。

以上のように、旅人が案内を雇う方法としては、宿屋などに斡旋を依頼するか、流しの案内人に直接交渉するかの二通りが基本である。しかしながら、両者の料金や案内内容について、明確な差異を見い出すことはできない。おそらく、見物場所や料金については、旅人と案内人の相対によって決められるケースがあるためであろう。

四　案内に関するトラブル

近世後期に至り、案内人の需要が高まってくる一方で、さまざまなトラブルが発生している。奈良奉行川路聖謨は、嘉永二年（一八四九）三月五日付の『寧府紀事』[31]で、

ならの堂社案内といふもの旅人をあさむきて、いろ〳〵のことをする也、甚敷は旅人の欠込訴なとする、いかに製しても不止、よつて工夫をして旅人宿江はり出しをさせたり、旅人をあさむくみち案内あらは早々可申出、直に召捕よしを所々へはりかみをしたり

と述べており、旅人に対して不正を働く悪質な案内人の増加が認められる。奈良における案内人の旅人に対する粗暴な振舞いについては、第一章で掲出した宝永五年（一七〇九）の町触でもうかがえるが、幕末にはそれに加えて案内のシステムに関わる問題が発生している。

諸国より奈良町江入来候旅人を寺社案内致候砌、刻限早キ節者当所ニ止宿相成候様無益之廻り道等いたし、隙取由候儀も有之由、右躰之儀鋪（致カ）間敷ハ勿論之儀、旅人施薬又者守札三社佗（託カ）宣、其外品々とも申勧メ相求させ候趣、重事ニおゐてハ不埒之至りニ候、案内之もの共儀、旅人之貴賤を不撰案内を乞候ハ、、旅人渋難不致様実事躰ニ案内致、産物商人共方ニ於も、旅人不存ニ張（強カ）而調物等相進メ間敷候、案内之もの共儀も商人之儀ハ有躰ニ申間敷教江遣、依怙贔屓ヲ以相違之案内致間敷、若不正之儀相聞候ハ、、当人者勿論案内世話方且町役人迄も吟味之上急度可申付候

右之趣不洩様町々江口達可致候

右之段被仰出候間、町役人より末々迄も不洩様被申渡候、以上

嘉永二酉三月廿四日

惣年寄

町代

如斯町々門々江宇陀紙弐枚継ニいたし相認張置、往来難義不致様取計可致候様惣年寄被申渡候

これは、嘉永二年、奈良町中に出された町触である。[32] 前述の『寧府紀事』を勘案すれば、川路聖謨が命じたものであろう。この触からは、案内人が旅人を奈良に宿泊させるため、わざと遠回りをして時間稼ぎをしたり、薬や守札などの購入を強要している実態が浮かび上がっている。前章で、宿屋が旅人に対して案内人の斡旋を行っていた事実を取り上げたが、本史料からは、案内人が旅人に対して宿泊や土産物を斡旋している様子がうかがえる。これは、宿屋などと案内人が相互に利益を獲得できる仕組みが成立していたことを示す。また、案内人は土産物屋などと結託し、旅人に損害を与えている事実も判明する。

道中日記では、奈良見物において刃物屋に立ち寄っているケースが散見される。天保三年（一八三二）の道中日記［30］では、案内人を雇い見物の途中「奈良本家兼物屋参候処、此処ニてハ御求被下間敷候、兼物類ハ京ニて御買被成候」と、買い物予定のない店に案内されている。嘉永六年（一八五三）の道中日記［60］も奈良で案内を雇い、三条之小鍛冶本家宗禄で小刀壱丁を購入している。この道中日記では、鍛冶屋へ案内人の誘導があったか否かは判然としないが、案内人が土産物の周旋をしていたとみてよいであろう。これらのことから、奈良の名産を扱う土産物屋が、旅人を自店に誘導するために、案内人と提携をしていたと考えてよいのではないだろうか。

また、大和めぐりにおいても、案内人・宿屋・旅人の間で揉め事が発生している。大坂の旅籠平野屋佐吉が講元となった『定宿附』には、旅人に対して次のような注意が記されている。(33)

一ならより大坂迄大和廻りいたし五十里の間、荷かつぎ道案内のもの賃銭弐貫文位の安直にて御連被成候様進メ申候共、決而御やとひ御無用ニ御座候、道中すじ飯もり女を進メ御泊り中飯等迄口銭を取、大坂宿も口銭遣し候宿へ引込、なれ合ニていろ〳〵しつぼう切候間、御つれ被遊候ハ、御用心被成候

また、平野屋佐吉が講元の別版『定宿附』にも次のような注意喚起がされている。(34)

一東国御旦那様方いせ御参宮より大和七在所御廻り被遊候ミぎり、荷かつぎ道案内と申ものよく御やとひ被遊候、此道案内之ものあざ名「しやうかん」と申触し候、右あざ名能承り合候処、奈良より大和七在所不残御参詣高野山御廻り大坂迄之道のり四十八りニ御座候処、七十八里も御座候趣申立、賃銭やすく仕御やとハせ申、四日半五日にて大坂迄御越之出来候処、六日七日も御供仕、其間ニ道中筋ニ而口銭を取御案内申、御路用金為遣申ス噂、右故「しやうかん」とあざ名付候由御座候間、御旦那様方御やとひ御召連被遊候得ハ能々御こゝろ得可被遊候やう奉存候

これらの定宿附によれば、大和めぐりの案内人が口銭を得るために、遅延行為をしたり、飯盛宿などを旅人に紹介している様子があり、案内人の悪質な行為が大和国内に留まらず広域的に問題化してきている。さらに、出版元は不明であるが、おそらく平野屋佐吉が出したと思われる「いせ

より大坂まで道中筋心得の事」という一枚刷では、大和めぐりの案内人のみならず、奈良の案内人についても悪質な行為を訴えている。[35]

又ならにて案内を取事又ハやまと案内御頼も御無用、此案内を御頼被成候者又々女郎屋や舩宿へすゝめ、是も三匁の口銭取候ゆへ、案内御たのミ御無用、又ならにて奈ら刀など又打物と申いつわり御すゝめ申候とも、けつして御買御無用、又是も御買被成候者壱貫文ニ付三百文の口銭をとり候、依之第一ならにて御通りの節とくと御心得之事ニ御座候

この文章からは、奈良の案内人によって宿屋の斡旋、土産物の周旋が行われていた実態がうかがえる。このように、大坂の旅籠が大和の案内人について悪態を訴える背景には、奈良・大坂間の宿屋・茶店・土産物屋同士による客引きや利益誘導がある。前述の『定宿附』[36]には、

大和所々宿茶屋之内又ハ御参詣所案ないのもの荷かつぎ道あんないのものども私方大ニ相そねみ、いろ〳〵と跡かたも御座なく候悪口を申、御旅人方の御こゝろをまよわし、大坂外宿へ御さしづ御案内仕候もの御座候、その義決而御まよひなく御尋被成下、御入宿のほどくれ〳〵も奉頼候

という一文があり、平野屋による旅人への注意喚起も、案内人が他所の宿屋へ客を送り込むことを防止するための策であったと考えられる。大坂の宿屋と奈良の案内人間の客引き争いは、次第に激化していったようで、平野屋板行の出版物がどの程度事実を伝えているのか疑問ではあるが、東国の伊勢参宮者など、大和の地理に不案内な旅人が増加するにつれて、案内を生業とする者も増加し、質の低下が生じたことは確かである。『寧府紀事』の嘉永元年（一八四八）四月二十六日付の記事に、[37]大坂の宿屋と奈良の案内人間の抗争の様子と、案内人の悪行に対する判決がみえる。

旅人の名所の案内してくらすもの七十人余あり、夫らかたとへは途中に而宮方の築地わきへ田舎ものゝ小便するをみつけておどし銭をとり、強而案内者になりて銭を貪る種々の悪法あるによりて、其頭取を呼出し而一通り糾之上白洲江廻し、彼らか書付にては案内者の風俗はよけれとも、大坂にてならの案内者といふものは不宜由を板行にいたし候由等申立あるによりて、夫までにわか支配所を悪敷申さするといふはいか成ことにや、わか内々糾之趣なくは大坂の板本よりは大にあ

らし、以後は無理はせぬかといひしに深く恐れ入たり、よつて頭取はゆるし、田舎ものより無理成銭をとりたるもの三人は入牢申付たり、これにてわか勤役中は博奕止、あしき案内はせぬなるへし

このように案内人の悪行は、地理に不案内な旅人を手引きするという案内人特有の機能を逆手にとった行為である。

大和の案内人の低質化は、案内人の増加による底辺の拡大と、案内人と宿屋・土産物屋との関係に要因があるといってよいであろう。これまで述べた通り、案内人は宿屋や茶店・土産屋によって旅人に斡旋され、案内人はそれらの宿屋へ旅人を斡旋している。このような構図が、案内人対旅人のみならず、案内人と大坂の宿屋とのトラブルを誘発し、案内人の悪評につながっているといえるのではないだろうか。

五　案内人の意義

寛政六年（一七九四）の『伊勢参宮所々名所並道法道中記』［8］には、「大和七大寺ならびに大坂まで案内進め申し候間受合申すまじく候、道中記の通り間違い御ざなく候」[38]と、道中案内記を所持していれば、大和めぐりに案内人は不要であると記述されている。しかしながら、土地に不案内な旅人が確実に複数の社寺・名所を巡り、知見を広めるためには、案内人を雇うのがより有効であろう。

宝暦八年（一七五八）に作成された『奈良名所子供案内』[39]は、子供の案内人が猿沢池畔から春日社、若草山麓、東大寺、興福寺を、寺社の由来や伝説、建物や宝物等について、掛詞や洒落・古歌を織り交ぜ説明しながら、手引きしている。本書は、子供の案内人に仮託した、奈良名所案内記であると思われるが、子供の案内人の存在も否定できない。旅人との会話形式で構成され、案内のコースや、案内人の知識量・教養の高さなど、奈良における案内の実態を知ることができる。

この中では、由来などに関して物語的な案内もされているが、観光するにあたって現地で実用に供する情報が盛り込まれている。たとえば、左府の森では「もりてのよい此茶屋で素麺なりともあがりませぬか」、春日参詣に際しては「上にハ水も不自由ニござります、此水にて御手水なさりませ」「御神楽ハ百文宛、九十六までいきたくバ鈴いたゞいてござりませ」、水屋社では「是が末社の仕廻でござり

ます、是から先ハ東大寺、跡ハ水屋の此茶屋で少々御休ミ被成ませ」、二月堂では「あらたな牛王が御ざります」、東大寺では「さあ〳〵皆さま、茶の銭のいらぬ施茶がある、御茶もたばこもあがりませ」と勧める場面がある。これらは、案内人の役割を如実に表している。近世後期には種々の道中案内記が出版され全国的に流布しており、旅人は事前にそれらを入手し、情報や知識を得ることは可能であったが、ここに示した事柄は、道中案内記では果たし難いものである。休所や手水の場所を把握し、素麺や茶などを勧めたり、神楽や牛王宝印の受け方を教示するなど、現場で必要となってくる情報を適宜提供することが、案内人の大きな役割であるといえる。さらに、「御国元への土産、奈良晒、油煙墨、悪魔を払ふ文珠四郎打もの御望ハ御ざりませんか」「奈良まんちう召て御口いわヰ被成ませ」と、土産物を勧めるなど旅人の消費を促す行為もみられる。これは、旅人に対して奈良の名産を紹介するという側面とともに、地元の経済活動への貢献といった面も存在する。

ほかにも名所記や道中案内記では果たし得ない、案内人の機能としては、本道から離れた場所の見物・移動、時間や体力に制約がある場合の近道利用、不慮の事故による迂回通行などが考えられる。『海陸道順達記』［15］には、「今日より二日目京都へ着いたし度ニ付、某等少々道ヲ急キ候儘、早や道ニても有之哉、問申シけれバ、此案内之申シケルハ、成るほど早や道有之候、格別なる義も無之候得共、弐り半計ちかしと也」と、案内人による近道の誘導がみえる。また、『山海日記』［23］の記述に、聖武天皇陵は「案内なくてハいれずといへばこゝにて拝ミてかへりぬ」とあり、案内人を伴っていなければ見ることのできない場所が存在していたことが認められる。里程や宿場の施設、宿屋の状況などの情報は、道中案内記によって得られるが、土地・時に応じた最新・最適な情報は現地の人間から得るのが確実であり、案内人を雇う利点はこのようなところにあったといえるのではないだろうか。案内人であれば、道中案内記に記載のない情報も聞き出すことができるため、道中日記には「其外旧跡案内ニ聞べし」［85］、「奈良之儀は名処多候間縁起並ニ案内等ニ委御尋御尤之儀ニ候」［51］などと記されている。しかし、『奈良名所子供案内』に「くわしき事ハ名所記御もとめ被成ませ」との一言もあり、案内人と道中案内記は、互いの機能に欠けている部分を補完しあっているといえる。

また逆に、案内人を雇うことによって生じる弊害も存在する。案内人を伴うことで、旅人の意思による行動が制限される可能性があり、行動範囲が限定されてくる。また、旅人の行動が制限されることにより、案内人による一定の宿屋への誘導や土産物購入の強要などの悪質行為が行われる結果を招いている。

おわりに

道中日記から、大和における旅人の行動と案内人の役割について検証した。未だ不十分な点も多いが、結論と課題を述べ、終わりとしたい。

近世の旅は大衆化し娯楽的要素が多いが、一方で知的好奇心を充足させるため、実用的な情報収集のための学習型の旅でもある。道中日記には旅人たちが新たな知識を学びとろうとする姿勢が随所にみられる。したがって、旅人の関心は現地での見聞に重点がおかれている。現地での見聞を助けたのが案内人である。大和では、見聞を広めるための情報を提供する案内人が、旅人の需要に応じるかたちで、各地に出現している。

大和における案内人は、元禄期には出現しているが、東国からの伊勢参宮者が増加するにつれて多様化し、奈良のみならず、各寺社や大和周辺においても活発に活動している。とくに、奈良や寺社境内・山内では、案内人は諸社寺・名所へ旅人を誘導するばかりでなく、由緒や風景などの解説、参拝手順の教示や土産物の斡旋など、観光ガイドとして機能している。これは、旅の多様化、旅人の知的欲求の高まり、情報獲得への旺盛な意欲によって、案内にも観光ガイド的な要素を求められるようになったと考えられる。一方、大和めぐりの案内人は、道案内・荷持ちといった機能に主眼が置かれ、社寺境内の案内人とは分業化している。大和めぐりは、コースが定型化されており、西国巡礼者など西側および南側から大和に入ってくる旅人に対しては対応していない。奈良では見物のコースが定型化しているが、案内人の普及によるものか、道中案内記などの影響によるものかまでは、判明していない。

いずれの案内人も、宿屋の関与が認められ、土産物屋との提携もうかがわれる。大和の案内人と宿屋・土産物屋との結託が、案内人の低質化に繋がり、大坂の宿屋との間にも客引きを巡るトラブルを発生させたとみられる。

大和は社寺や旧跡が多在し、土地に不案内な旅人が、限られた日数で巡るには相当の予備知識を必要とする。したがって、円滑且つ安全に大和を巡ろうとすれば、案内人を利用することは簡便で有効な手段であった。しかし、案内人を雇わずに奈良見物や大和めぐりが行われていることも事実である。旅人の事前学習・情報収集能力如何では、旅人の意思による広範囲の行動が可能であったことを証明している。また、近世中期以降は街道施設も整い、とくに東大寺大仏復興以後観光都市化された奈良においては、道に迷ったり、休泊が確保できなかったりという事態は考え難く、奈良の案内人に道案内という役割を期待する旅人は少なかったのではないだろうか。とくに、奈良や諸社寺においては、知識や情報の享受を目的に案内人を雇うケースが多かったのではないかと考える。旅人の知見の広まりは、寺社における宝物拝見や縁起・絵図の購入などの行為にみてとれ、旅人の旅に対する意識の向上が、案内人の観光ガイド化につながっている。

こうした案内人の需要が増加し、活動が活発になるにつれ、旅人に対する横暴な行為や口銭の授受、大坂の宿屋との客引きなどのトラブルが多発していることも確認した。これらの問題については、明治期以降、案内人規則の制定、警察による取締りの対象にまで発展しており、継続的に検証することによって、大和における観光の変質を探ることができるのではないかと思うが、この点については別の機会に稿を改めることとしたい。

註

（1）山本光正「旅日記にみる近世の旅について」（『交通史研究』一三、一九八五年）、桜井邦夫「近世における東北地方からの旅」（『駒沢史学』三四、九八六年）、小松芳郎「道日記にみる伊勢参宮―近世後期から明治期を通して―」（『信濃』三八―一〇、一九八六年）、小野寺淳「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷―関東地方からの場合―」（『筑波大学人文地理学研究』一四、一九九〇年）、田中智彦「道中日記にみる畿内・近国からの社寺参詣」（『交通史研究』四九、二〇〇二年）

（2）桜井邦夫「旅日記に見る近世の旅と宿泊」（『交通史研究』四九、二〇〇二年）、高橋陽一「多様化する近世の旅―道中記に見る東北人上方旅行―」（『歴史』九七、二〇〇一年）、鎌田道隆「近世的旅観の形成―伊勢参りの旅―」（『奈良史学』二七、二〇一〇年）

（3）山本光正「諸国人にとっての江戸―社寺参詣人を中心に―」

（『国立歴史民俗博物館研究報告』一四、一九八七年）、前掲

（2）高橋陽一論文

（4）大久保信治「江戸時代奈良の旅籠屋仲間の問題」（『ビブリア』七四、一九八〇年）、山田浩之「近世大和の参詣文化―案内記・絵図・案内人を例として―」（『神道宗教』一四六、一九九二年）、古川聡子「近世奈良町の都市経済と東大寺復興」『ヒストリア』一六九、一九九九年）、古川聡子「近世奈良町における都市政策の展開」（『ヒストリア』一九一、二〇〇四年）

（5）前掲（1）山本光正論文七九～八〇頁

（6）土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』（岩波書店、一九八〇年）二七頁

（7）平井良朋「近世奈良地誌小考」（一）～（四）（『大和文化研究』九―八・九―一一、一九六四年、一一―一一、一九六六年、一三―一二、一九六八年）、平井良朋「汎大和近世地誌小考」（一）（二）（『大和文化研究』一四―六・一四―九、一九六九年）、吉海直人「「絵図屋庄八」について―近世以降の奈良出版文化史管見」（同志社女子大学『学術研究年報』四四―四、一九九三年）、山近博義「近世奈良の都市図と案内記類―その概要および観光との関わり―」（『奈良女子大学地理学研究報告』五、一九九五年）、吉海直人「「絵図屋庄八」追考」（同志社大学『総合文化研究所紀要』一四、一九九七年）、鎌田道隆「奈良大仏前絵図屋筒井家の名所記・案内図の歴史研究」（『奈良大学総合研究所特別研究成果報告書 大和・奈良地域の観光に関する学術研究―伝統と課題―』二〇〇二年）、森田憲司「奈良大学所蔵の奈良観光関係資料について―江戸時代を中心に」（『奈良大学総合研究所特別研究成果報告書 大和・奈良地域の観光に関する学術研究―伝統と課題―』二〇〇二年）、前掲（4）山田浩之論文

（8）宮本勉「「佐藤善兵衛道中記」の研究」（『地方史静岡』一六、一九八八年）九三頁、前掲（4）山田浩之論文一三～一四頁

（9）平岡定海著『東大寺辞典』（東京堂出版、一九八〇年）二八九頁、「この法会のあいだ案内人は一人当り一〇〇両もかせいだとか、大阪より生駒山を越えて闇峠をすぎてくる人が連日列をなしていたというような話も伝わっている」

（10）前掲（4）山田浩之論文一三頁

（11）「大仏開眼會」（奈良県立図書情報館蔵写真製版『庁中漫録 玉井家文書』四四）

（12）「和州志」（奈良県立図書情報館蔵写真製版『庁中漫録 玉井家文書』二二）

（13）前掲（4）吉川聡子「近世奈良町の都市経済と東大寺復興」五九～六〇頁、古川聡子「近世奈良町における都市政策の展開」三一～三三頁

（14）『川路聖謨文書』四（日本史籍協会叢書六一、一九六七年覆刻）一七九頁

（15）大宮守友編著『奈良奉行所記録』（清文堂、一九九五年）三九二～三九三頁

（16）「奈良与力橋本家律令雑記」（『奈良市歴史資料調査報告（一

七)』、二〇〇一年）三七頁

(17)「永代帳」（『奈良市古文書調査報告書（一〇）』一九九四年）八八頁

(18) 上野利夫「（翻刻）寛政九年の道中日記『上方一見手引帳』―甲州春米村から上方への旅―」（『天理参考館報』一五、二〇〇二年）二〇・二二頁

(19) 今井金吾監修『道中記集成』一三（大空社、一九九六年）二六七頁

(20) 今井金吾監修『道中記集成』一九（大空社、平成八年）二八六～二九四頁。『七ざい所道しるべ旅行便覧』は宝暦十一年（一七六一）初版、『道中記集成』には享和二年（一八〇二）の再版本が収録されている。

(21)『浪華組道中記』天保十年版（『道中記集成』三九所収）九六頁、『浪華組道中記』無刊記（『道中記集成』三九所収）二四〇頁、『浪花講道中記』天保八年版（奈良大学史学科所蔵本）、『浪華講道中記』弘化二年版（天理参考館所蔵本）

(22) 前掲（19）二六七頁

(23) 鎌田道隆氏の教示によると、法隆寺では一山に関係なく案内人が活動し、トラブルを引き起こしている例が法隆寺の記録類にあるという。

(24)『町田市史』上巻（町田市史編纂委員会、一九八四年第三版）一一七三頁

(25)「奈良曝」（『奈良市史編集審議会会報』一、一九六三年）六七頁、「奈良坊目拙解」（『奈良市史編集審議会会報』一、一九六三年）二九頁

(26) 前掲（4）山田浩之論文一六～一七頁。山田氏は『町田市史』所収の史料について、「案内人の初期の形と考えても良いかもしれない」とされている。その上で、包常作右衛門については「案内人をまとめていたとも考えられる」と述べておられる。

(27) 前掲（20）二九七頁

(28) 前掲（21）。また、明治期の例ではあるが、明治六年（一八九三）発行の真誠講定宿帳にも、小刀屋善助を定宿とし、「名所古跡多シ、宿より御案内可仕候」とある（『道中記集成』四四、三五七頁）。

(29) 井手今滋編・辻森秀英増補『新修橘曙覧全集』（桜楓社、一九八三年）二一八頁

(30)『三戸史料叢書 第六集 旅へのいざない―伊勢参宮道中記―』（三戸市教育委員会、二〇〇三年）五九～六〇頁

(31)『川路聖謨文書』五（日本史籍協会叢書六二、一九八四年覆刻再刊）九一頁

(32)「永代帳」（『奈良市古文書調査報告書（一〇）』一九九六年）八八頁

(33)『東海道秋葉鳳来寺伊勢参宮大和七在所高野山道長谷南都越定宿附』（奈良大学鎌田研究室所蔵）

(34)『東海道秋葉鳳来寺伊勢参宮大和七在所高野山道月本南都越定宿附』（奈良県立大学所蔵）

(35)「いせより大坂まで道中筋心得の事・大阪迄道筋心得書」（奈

良大学鎌田研究室所蔵）

（36）前掲（34）

（37）『川路聖謨文書』四（日本史籍協会叢書六一、一九六七年覆刻）一七九頁

（38）村山 磐「阿部家伊勢参宮道中記について―寛政6年の資料」（『東北学院大学東北文化研究所紀要』二四、一九九二年）一七二頁

（39）『奈良名所子供案内』（奈良大学図書館所蔵本、なお、弘化五年の筆写本である）、『奈良史学』一九（奈良大学史学会、二〇〇一年）に翻刻されている。